



**えっ、能力なしでパーティ追放
された俺が全属性魔法使い!? 1
～最強のオールラウンダー目指して
謙虚に頑張ります～**

α L P H α L I G H T

たかたちひろ

Takata Chihiro



ユウヒ

こうしゃくけ
テンバス公爵家
の次男。風属性魔
法を得意とする。

ゼクト

タイラーがいたパーティの
元リーダー。普段は大人し
いが、実は短気。

アリアナ

明るく活発なタ
イラーの幼馴染。
水属性魔法と弓
を使うのが得意。

マリア

山の中でモンスターに
おそわれていたところ、タ
イラーに救われた少女。

エチカ

からだ
タイラーの妹。身体は
弱いが、しっかり者。

キューちゃん

しょうかん
タイラーが召喚し
た高位の精霊獣。
普段は猫の姿でい
ることが多い。

タイラー

魔法が一切使えないこと
を理由に、パーティから追
い出された冒険者。全属
性魔法を習得した後、冒
険者として再出発する。

登場人物紹介
Main Character

一章 全属性魔法が使えるようになりました

ギルドで受けた依頼をこなすため、ダンジョンを探索している最中、俺——タイラー・ソリスとパーティメンバーの三人は強力な敵モンスターと遭遇してしまった。

隣では、リーダーのゼクト・ラストーンが、ずれた眼鏡を震える手でかけ直しながら、悲鳴まじりに叫び出す。

「なんで中級ダンジョンに、あんな化け物がいる!？」

今俺たちの目の前にいるのは、ワイバーンという狰狞なモンスターだ。遠距離、近距離とも恐ろしい攻撃力を誇り、冒険者の間では銀翼竜と呼ばれ恐れられている。

初級、中級、上級、超上級とランク分けされているダンジョンにおいて、本来なら超上級ダンジョンにしか出現しないと言われているはずなのに……想定外の出来事だ。

戦うまでもなく、歯が立たない。

そう、メンバーの誰もが察していた。

パーティメンバーのアリアナ・ベネットとシータ・ハートリーは、攻撃を繰り出しながら、必死に逃げ惑う。

ゼクトも隙を見て、黒い双剣の先から火の玉を飛ばすが、ワイバーンにはまったく効果なさそうだ。それどころか、あっさり弾き返されていた。

俺はいえ、三人と違って魔法が使えないため、ワイバーンの攻撃を躲しつつ、この状況を打開する術を考える。

ワイバーンはそんな光景を嘲笑うかのよう、悠然と天井近くを旋回していた。そして大きな翼で風を起こし、あちこちに業火の息を吹く。

咆哮がダンジョン内に轟くと、天井はその振動に耐えきれず、パラパラと破片を落としていた。

「タライ！ お得意の戦術でどうにか回避できないのですかー」

ゼクトが俺に向かって怒鳴り声をあげる。

タライというのは、彼が俺につけた蔑称だ。

剣術、戦術、体術などに心得こそあれ、俺は魔法が一切使えない。

火属性魔法と双剣で戦うゼクトのように、冒険者は、魔法と武器を組み合わせることで、ようやくモンスターと渡り合えるようになる。だが、俺にはその戦い方ができないのだ。

タライという蔑称は、俺の本名と戦闘で――前衛としてほとんど戦えないお荷物という意味からつけられた。

「……すまん。今の段階では何も……」

「君はこんな時まで使えないのですね。ろくに戦闘もできないくせに、ふざけているのでしょうかー」

俺の返答に、声を荒らげながら罵倒するゼクト。

「元々君のことは、伝説の冒険者の息子だっていうから、パーティに加えてやっただけなんです！ 親の能力を母親の腹の中に置いてきたのですか。その腰の立派な剣も、戦えない君が持っているは飾りかしと思えませんか」

こんな危機的状況にもかかわらず、俺を貶す時だけイキイキとしていた。

奴が言うように、俺の親父はランティス・ソリスという、歴史に名を残した冒険者だ。俺が冒険者になる少し前にダンジョンで謎の死を遂げたのだが、複数の魔法属性を使用できる稀有な存在でもあった。

だから息子の俺も、もしかしたら強力な属性魔法が使えるのではないかと思ったのだが……

魔法属性が誰であっても発現するはずの十五歳の誕生日、俺は魔法を使えないままだった。

本来ならステータスボードに、火や水など発現した属性が記されるのだが、俺のボードに表示されたのは、「???」という文字だ。

発現するのが少し遅いだけかと思ったが、それから丸二年が経って、十七歳の誕生日を

迎えた今日まで、いまだに一つの魔法属性も発現していない。

だからゼクトに蔑まれるのも、仕方ないことではある。

悔しさを抑えて、自分を納得させた俺は戦略を再び考えはじめた。

状況は依然厳しい。ワイバーンは、人に遭遇したことで興奮しているらしく、一向に退いてくれる気配はない。出口を塞がれれば、一卷の終わりだろう。

しかし出口までの距離は遠く、四人で一斉に向かえば一網打尽にされかねない。

ダンジョン内が明るいので、視界は利いていて、敵の姿や攻撃が見えるのが不幸中の幸いだが、それだけではどうにもならない。

俺は現段階で出た結論をゼクトに伝える。

「隙さえ作れば逃げられるかもしれないが……他は何も思い浮かばない、ごめん」

「ちつ、本当に役に立たないな。息子が引き継いだのは苗字と武器だけかよ」

俺の言葉に、ゼクトは怒りをあらわにする。

普段は物静かで優等生のふりをしている男だが、怒ると手をつけられない、短気で粗野なタイプなのだ。

いつの間にか、普段は丁寧な口調も荒くなっていた。

「タイラーにばかり当たるのはやめなさいよ！ それもこんな時に！」

アリアナが攻撃を上手く回避しながら、ゼクトの暴言を止めてくれた。

水属性魔法と弓の使い手の彼女は、走っている姿も絵になる美人である。華奢でありながら、出るところは出た身体に、髪留めでまとめた長い蜜柑色の髪と切れ長の目。

こんな状況でなかったら、見惚れていたかもしれない。

「この無能が使えないのは本当だろう！」

「タイラーはよくやってるわよ。そもそもここまで来られたのも、タイラーが誘導してくれたからじゃない！」

「それでこんな目に遭ってるんだぞ!？」

「それはたまたまでしょ。ここまでは敵に遭遇せずに来てたわ」

アリアナが必死で俺を擁護する。

実際、ここでワイバーンと対峙するまで、俺はモンスターの気配を察知し、戦闘を選ける道を選んできた。

だが、ワイバーンに限っては、眠っていて陰に身を潜めていたため、気づけなかったのだ。

それまでは、今日は俺の誕生日だから、もしかしたらモンスターと出くわさなかったのも、そのお祝いに神様が授けてくれた強運かと思っていた。

そこへきて、この仕打ちは酷すぎる。

「最後にこんな化け物引き当てるくらいなら、序盤でモンスターと戦闘した方がましだ

ろ！」

そう吐き捨てるゼクト。数秒後、彼のすぐ横を火球が通り過ぎた。

直撃は避けたようだが、勢いでゼクトは吹き飛ばされてしまう。

「ゼクト、大丈夫か！」

俺は声をあげて、ゼクトの元に駆け寄った。

『仲間は大事にしろ』とは死んだ親父の言いつけであり、家訓だ。

『大切な人に弱いところを見せるな』と並んで、よく言われていた。

ゼクトにはしょっちゅう罵られていたが、パーティを組んでいるのだから、仲間は仲間だ。

だが、彼は俺の姿を一瞥すると、突然笑いはじめる。

絶望のあまり、おかしくなってしまったのだろうか。

「はは、はははっ。思いついたぞ、逃げられる方法を！」

「なによ、どういう方法？」

アリアナが急かすように問う。

「こいつを、タライを捨てればいいんだ。この無能を盾にして、時間を稼ぎ、その間に逃げれば全て丸く収まる」

俺を、このワイバーンの生贄にする……？

「はあ!? なに言ってるんだよ！」

「そうよ、ふざけないで！」

俺の叫びと、アリアナの抗議の声が重なった。だが、ゼクトは取り合わない。

「ふざけてなんかいない。隙が作ればと言ったのはタライだしな。これは戦略的撤退だよ。

それを私が考えてやったのだ、無能のタライに代わって。はははっ！ シータ！ この無能を始末しなさい」

それまで無言で攻撃をかわすことに専念していたシータに、ゼクトがそう命じる。

彼女は、その杖で様々な魔術を扱う雷属性の魔導師だ。長い付き合いだが、物静かで、何を考えているのかあまり分からない。

切り揃えた紫色の髪に目を隠して、こくりと頷くシータ。

「……了解」

「おい、シータ！ やめろー！」

「そうよ、どうしちゃったの、シーター！」

しかし、俺とアリアナの主張は届かない。

「……ごめん。あたし、ここで死ぬわけにはいかないから」

彼女はこちらから顔を背けると、俺の周囲に電気のパールを作った。

「ぐああっ！」

少し触れてみたが、想定以上の威力に俺はしゃがみこむ。
抜け出すのは困難そうだった。

どうやら本当に生贄にするつもりらしい。このままでは籠に囚われたも同然だ。どうあがいても、ワイバーンに捕食されるのは避けられない。

……くそ、なんでこんなことに。

歯噛みしかできない無力な俺を見下ろしながら、ゼクトが嘲笑する。

「は、いい気味だ！ 使えない奴が最後に役に立ってよかったよ、まったく。お前は所詮家畜のようなもの。タライの代わりなんでも拾ってこれるからね」

「……おい、待てよ。仲間だろ!? ずっと競い合ってきたじゃないかー」

今でこそ溝ができてしまったとはいえ、幼い頃から四人、仲良くやってきたはずだ。

特にゼクトとは、男同士ということもあり、切磋琢磨してきた。

その頃を引き合いに出し、どうにか思い留まるよう呼びかける……が、ゼクトはその言葉を聞いて、再び笑い出した。

「ははっ、あーだめだ、面白いことを言うなあ、タライは。仲間とか好敵手というのは、対等だからそう呼ぶんだよ。今の私とタライでは、ご主人様と奴隷と言った方がふさわしい」

ゼクトはこの状況下で、悦に入っているようだった。もはや俺の言葉は届きそうにない。

「あなたね、自分がなにやってるか分かってるの!？」

変わらずアリアナだけが俺を庇ってくれるが、ゼクトはもう背を向けていた。

「行きますよ、シート、アリアナ。私と一緒に帰りましょう」

「おい、ゼクト！ 待ってくれ」

「待つわけがないだろう、馬鹿者。ははは！」

そのまま高笑いとともに、ゼクトは走り出した。シートも若干の未練がある素振りを見せつつ、彼の後を追って走り去っていく。

「……こんなところで終わりかよ」

俺は、歯をざりつと鳴らした。信頼していた仲間裏切られたショックもあるが、それだけが理由ではない。

家に残してきた妹、エチカのこと引っかかっていたのだ。

エチカは俺の四つ下で十三歳。若くして亡くなった母と同じで、昔から病弱だった。

そして数年前、親父がタンジョンで亡くなってからは、俺がどうにか面倒を見てきたのだ。

俺がいなくなった後の彼女のことを考えると、死んでも死にきれない。エチカのためにも生き残らなくては。

改めて前を向くと、ワイバーンはもう俺に狙いをつけていた。

その口の奥では、火炎の塊が渦巻いている。あれが当たったらひとたまりもないだろう。
「ウォーターシャフト！」

打つ手なしかと思ったその時、ワイバーンの首元に一本の矢が刺さった。
どこからともなく飛んできた矢に驚き、後ろを振り向くと、そこには仁王立ちするアリアナの姿。

「アリアナ！ なにをしてるのです、こっちに来なさい！」

来た時に通った広間の入口までたどり着いたゼクトが、随分遠くから彼女に呼びかけている。

「あなたの言うことなんか聞くもんですか！ この裏切り者！」

ゼクトの言葉に反抗しつつ、アリアナは弓を引く手を止めない。

「は、あなたのことは裏切りませんよ。結婚してやったっていいですよ、シータとまとめてねえ！」

「うるさいっ、この変態っ！」

叫びとともに放たれた一閃は、再びワイバーンの首元を穿つ。

だが効果はなく、びんびんとして、低空を悠々と飛んでいる。

彼女はめげずに、気丈にも、ワイバーンに向けて弓を構え続ける。

「やめろ、アリアナ！ 無駄だ！」

レベル10で、パーティの中では優秀なアリアナだが、今回は相手が強すぎる。

圧倒的な実力差で、見るに堪えない。

こんな状況下でも守ろうとしてくれるのはありがたいが、それで一緒に大死にしては意味がない。

「……行けよ、ゼクトのところ。アリアナには生きてほしい。エチカのこと、頼むよ！」

「嫌よ」

「なんでだ、このままだと死ぬぞ？」

俺を助けようとしてくれる気持ちは嬉しいが、アリアナをこれ以上危険な目に遭わせたくはなかった。

「そもそも私がこのパーティに入ったのは、タイラーがいるからなの！ それに……」

「それに？」

「あなた、今日誕生日でしょ！ そんな大事な日に死なせるわけにはいかないの。生きて帰るよ、絶対！ エチカちゃんだって待ってるんだから」

「……アリアナ、知ってたのかよ」

誰にも祝われないから、てっきり忘れられていたものと思っていた。

「当たり前じゃない。何年祝ってきたと思ってるのよ」

「……十年以上だな」

「そう。それで忘れると思う!? とにかく、こんなところで死なせるわけにはいかないのよ」

「……なんで」

「あなたが死んだら、私の生きてる意味がなくなるもの」

「そこまで大事に思っていてくれただなんて知らなかった。俺はうつかり泣きそうになって、最後の一线で堪える。感傷に浸っている場合ではない。」

「アリアナは諦めないでくれている。まずはこの状況をどうにかすることに必死になるべきだ。」

「やれることはないかと、まず俺はステータスボードを表示させる。」「???」と表示された属性部分を連打してみた。

「こんなことは、これまでも何度もやった。透明なのでひたすらすり抜けるだけ。なんも起こることはなかったのだが……」

「……なんだこれ」

「今日は様子がおかしい。」

『残り十秒』

「今まで見たことのない表示がステータスボードの下部に記されていたのだ。いったい何のカウンタダウンだろうか。」

「気を取られている俺に向かって、ワイバーンが一段と大きな火球を吐いてくるが、それは途中でかき消えた。」

「アリアナが水魔法を纏わせた矢を放って対処してくれたらしい。」

「しかしそれにより、ワイバーンの攻撃の矛先が彼女に向く。」

「きゃっ!」

「ワイバーンが生み出した鋭い風の刃が、彼女の肩を掠めた。」

「致命傷ではなさそうだが、出血がひどい。」

「白地に縁取るような橙色の線が入った、彼女お気に入りの戦闘服が赤く染まる。」

「アリアナ! 俺の後ろに隠れろ!」

「い、いやよ! あなた死ぬつもりでしょ!? 絶対いや!」

「だからってそんな怪我までして、どうすんだよ!」

『残り五秒』

「狭いダンジョンの中、ワイバーンは大きく羽を広げ、恐ろしい風圧を巻き起こして飛び上がる。」

「巨体を針のように尖らせると、アリアナめがけて急降下してきた。」

『残り一秒』

「アリアナ!」

電気のベールで死んだらその時はその時だ。それよりも、目の前で大切な人を失うわけにはいかない。

俺は、意を決して電気のベールの外へと飛び出した。全身が針で刺されたように痛む。見上げれば、ワイバーンは体に火を纏わせながら上空から迫っていた。

俺はアリアナの前に立ち、鞘から刀を抜く。

「タイラーの馬鹿っ！」

正面から斬ってかかって、敵うわけもないが、どうにかアリアナだけは守らなくてはならない。

何かの奇跡が起きないかと防御魔法の詠唱を唱えてみる。

覚悟を決めた俺が、剣を振ったその時――

『時間になりました。これより、冒険者タイラー・ソリスに全属性魔法を付与します』

不思議な声が頭の中に流れた。

死を覚悟していたが、いつまで経っても痛みが襲ってこないで、しばらくして目を開ける。

俺とアリアナの前に、地面から湧き出るように水壁ができていた。

ワイバーンは、その奥で羽を痛めたのか、よろよろと飛び上がるところだった。

どうやらこの水壁が、ワイバーンの巨体を弾き返したらしい。

アリアナの水属性魔法のおかげか……？

そう思っ、彼女の方を振り向くが、ふるふると首を横に振っている。

では一体、この強力な水壁は誰が生み出したんだ？

まさか、魔法を使用できないはずの俺がこの水壁を発動したのか。しかも、ワイバーンの体当たりを物ともしない、強固な防御壁を……？

目の前の状況に理解が追いつかず、目を瞬いていると目の前のアリアナが声をあげた。

「……私、今思い出した。あなたのお父さんの秘密……そういえば聞いたことがあったわ！」

「親父のこと？」

「そうよ。あなたのお父さんは、火、水、雷の三属性の魔法を使えたでしょ」

彼女の言う通り、俺の親父は魔法の天才と誰からも称賛されていた。それでいて努力を惜しまない、一流の冒険者だった。

そんな親父の秘密って……

「でもね、魔法属性が発現するのが人より二年遅かったんだって！これって、ちょうど今のタイラーと同じ状況じゃない？」

「俺は聞いてないぞ、そんなこと」

「私も今ようやく思い出したの。元々ママとの雑談の中で聞いたくらいだったし……」

「親父のやつ、どうして俺に隠して……」

そう言いかけて、ふと我が家の家訓が頭をよぎった。

それは『大切な人に弱いところを見せるな』というもの。

まさか、親父は俺に魔法の発現が遅かったことを悟られまいとしたのか。なんだよ、それ。

気が抜けそうになりつつも、再度ステータスボードを確認する。

さっき謎の示した通り、「???」だったところが、びっしり「火、水、風、雷、

土、光、闇」と埋まっている。

まさか一つだけでなく七属性魔法の全てが発現した!?

親父は例外だが、一般的に、使用できる属性魔法は一人につき一種類だったはずだ。

全てレベル1の表示だが、威力はどうなのだろう。

さっきの水壁がワイバーンを軽く跳ね返した以上、それほど低くはないかもしれないが……

何といっても相手はかなり格上のモンスターなのだ。予断を許さない状況には変わりない。

「それで、大丈夫なの? 戦えそう? 無理なら私が……」

「アリアナは下がっててくれよ」

俺は、さも余裕があるかのように笑いかけた。

ともかく、一番効果がありそうなのは……

俺は握っていた刀を一度鞘に納める。柄を握ると、かつてないくらい力が漲ってきた。

魔法を使うという初めての感覚に少し高揚しながら、刀身の先まで魔力を行き渡らせた。

「エレクトリックフラッシュ!」

宙を飛ぶワイバーンの動きを見極めて、抜刀する。

一閃、放たれた青白い斬撃は、自分でも驚くほどに速く大きくワイバーンの全身を覆った。

その勢いはすさまじく、衝撃波は奥の土壁をも揺らす。

「怯みぐらいはしたか……!？」

「分らないけど、どうかしら」

アリアナと二人、敵の出方を窺って警戒の構えは崩さない。

だが、はたして反撃はやってこなかった。

ワイバーンは、灰と化していたのだ。空中から粗い粒になって降ってくる。

電撃の威力が、ワイバーンの全身を焼き切ったのだろう。

想像以上だ。

怯えることしかできなかったさっきまでとは打って変わって、呆気ない攻防だった。

あのワイバーンを一撃で屠^{ほふ}つたことに、自分自身戸惑^{とまど}う。
アリアナも、目が点になっていた。

『冒険者レベルが5から20に上がりました。水魔法、雷魔法のレベルが2に上がりました』
ステータスボードにそんな表示が出た。

冒険者レベルは、強いモンスターや数多くのモンスターを倒すことでその経験値が積み重なって上昇する。どれくらい強敵を倒したかを示す指標^{しひょう}のようなものだ。

今まではレベルが上がることで自体そんなになかったため、気にはしていなかったのだが……一気に10以上も上がった。

呆然^{ぼうぜん}とすることしばし、俺はようやく自分がワイバーンを倒したという事実を実感する。
……勝利したのだ、高ランクモンスターに。ゼクトに今までお荷物扱いされていた俺が。

「勝った、勝ったんだよ！ ワイバーンに！ すこいよっ、本当にすごい！ タイラー、格好いいっ！」

「お、お、おう！」

アリアナが喜んでびよんびよん跳ねる。可愛^{かわい}く手をあげるが、ささほど負傷^{ふしやう}した箇所^{かしよ}が痛むらしく、すぐにその手は自身の肩へと伸びた。

「……怪我^{けが}してたの忘れてたわ。あはは……」

そう言っ、アリアナは俺にふらりと寄りかかってきた。



柔らかい、いい匂いがする——だなんて呑気に思ってる場合じゃない。
今の俺なら治療を施せるかもしれないかった。

魔法による治療は、光属性にあたる。

今まで魔法を使えずとも、勉強を怠らなかつたおかげで得た知識が、役に立ちそうだ。

彼女の肩に手のひらをかざすと、指先が薄く光って、だんだん温かくなってきた。

「……治せるの？」

「たぶんだけど。ちょっと、じっとしててくれ」

えっと、このまま、傷口に当てていればいいのだろうか。俺が読んだ書物にはそう書いてあったはずだが……

いかんせん、知識があるだけで治療経験がないので分からない。

少しもたついていると、手の光が一層眩しくなつて俺は目を瞑る。

ふと目を開けると、なぜか手の光が球体へとまとまり、手のひらから離れていた。

そして球体は次第に形を変え、ふと気づくと毛並みもふもふした白猫になっていた。

「ご主人様！ ボクが治すにゃん♪」

……やたら輝いて、言葉を発していることを除けば、普通の飼猫のようである。

「か、かわいいー!!!」

アリアナが歓喜の声をあげる。痛みを忘れるくらいの愛らしさだったようだ。

実はアリアナは、動物を模したアクセサリをつけたたり、手芸を試みたり、可愛いものには目がない。

冒険者としての凛々しいところだけでなく、彼女には乙女な一面もあるのだ。

けれど、猫の方はといえば、その好意に応えるつもりはないらしい。

「ボクは、ご主人様の猫なので！」

猫はそう言つて俺の肩に乗ると、にやんにやんと、頬に身体を擦りつけてくる。

柔らかなすぎる極上の感触に癒されていると、不思議なことに、全身の痛みが引いていく。

「これ、君のおかげ？」

「そうです！ ボクは精霊獣で、治療は得意技の一つなんです。ボクがちょつと触るだけで、少しの傷くらいなら、あら不思議♪ 消え失せちゃうのです！」

精霊獣といえば、光属性魔法の使用者のみ召喚することのできる存在で、主に虎などの攻撃用の動物を指すのだが……まさか回復メインの精霊獣がいたなんて知らなかつた。

「君、すごいな！」

「ご主人様！ よければこのボクに名前をください」

「ああ、うん、考えとく。だから、まずはアリアナを治してやつてくれないか？」
もふもふとした毛並みの猫は、俺の組んだ腕の中に落ちてくると、小さく丸まる。

「……どうしても？」

少し洪るようにながら、上目遣いで聞いてきた。

俺が迷わず頷くと、猫は仕方ないにやゝ、と地面へ飛び降り、ぱあつと身体を輝かせはじめた。

光が収まったあとその場にいたのは、なんと少女だった。

ただし頭には猫耳がついていて、長い尻尾が腰辺りで揺れている。

「嘘つ、猫ちゃんが人に!?」

アリアナの声が裏返る。

俺も驚きすぎて目を見開くことしかできなかった。

毛の色と同じく髪も、雪のような白色をしていた。アリアナとはまた別の種類の可愛さだ。きゅるんと跳ねた髪にくるくるの目が、なんともあざとい。

「これだけ傷が深いと、人型にならなきゃ治せないんです。ご主人様、よく見ててくださいね」

俺に目配せをすると、元猫の女の子は、アリアナを抱え上げる。

その直後、あろうことか唇を奪った。

アリアナがじたばたするの物ともせず、十秒以上口づけが交わされる。

さらにこの猫娘は、アリアナの形の綺麗な胸元にまで手を入れはじめ……

「ち、ちよっと！ み、見ないで、タイラー！」

俺があたふたしているうちに、三分間ほどの過激な時間がようやく終わる。アリアナの傷はすっかり元通りになっていた。

「嘘つ、なんにもない！ 傷が塞がってるわ！」

傷を負ったはずの肩には、痕すら残っていない。

ただ、さすがに裂けてしまった服までは戻せないようだ。俺は自分の上着を彼女にかけてやる。

「……ありがとう。優しいのね。知ってたけど！」

そんなアリアナの言葉とともに、チュッと柔らかい感触が頬にあたる。

思いがけぬご褒美を貰ってしまった。かあつと体が熱くなるのが分かる。

アリアナも、自分からやったくせに、顔が真っ赤だった。

「その、えっと、感謝の気持ちを表したくて！」

「……お、おう！」

俺たちが照れ合っていると、なぜか猫耳少女が、むっと眉を寄せていた。

「ご主人様！ ボクはもっと過激なことだってできますよっ？」

どうやらアリアナに張り合おうとしているようで、そう言いながら薄い生地ワンピースに手をかけようとする。

精霊獣の服って脱げるものなのか？

そんなことを考えているうちに服がどんどんはだけていくので、慌てて止めようとするが、俺一人では止められそうにない。

「アリアナ、手伝って……って、どうした、アリアナ？」

「わ、わ、わ！」

「……わ？」

「私だって、ちょっと脱ぐくらいでできるんだからああああっ！」

ダンジョンの天井に反響して、三度こだまするほどの絶叫だった。

しかし、内容が内容だったからか、すぐに恥ずかしくなったようで、アリアナは地面に屈んで、土いじりを始めてしまった。

すごい勢いで掘れていく。

なんだこの可愛い生き物たちは。

そう思っただけで眺めていたら、ふと思いついた。

「……決めたよ、君の名前」

「はっ、ボクの名前！ なんですか、ご主人様っ」

「キューちゃん、ってどうかな」

なんだか、キュートな見た目だし、窮地を救ってくれた。

「はいっ、ご主人様のつけた名前なら、『ゴミ猫』みたいな名前でも受け入れる所存でし

たので、最高です！ 百点満点ですっ」

キューちゃんは、とんでもないことを口走りながら、猫の姿へ戻る。

「必要な時がきたら、また呼び出してください！ ボクはご主人様に呼ばれば、いつでもどこでも出てまいります！ 治療だけじゃないですよ、嗅覚を使つての探索も得意ですし！ ボク、とにかく役に立ちますから！」

最後の最後まで自分の能力を売り込みつつ、彼女は俺の中へと溶け入っていった。

これだけの深手が治るのなら、もしかしたらエチカの病だっ——

俺にはもう、キューちゃんが必要になる未来が見えていた。

「帰ろうか、アリアナ」

「ええそうね」

まだ身を丸めていじけていた彼女に、手を伸ばす。

普段ならできないくらい、キザな行為だったかもしれないが、アリアナは迷わず俺の手を握ってくれた。



一方、タイラーを生贄に、ギリギリのところでワイバーンから逃げ延びたセクトとシー

タは、一目散にフロアを引き返していたのだが……

ワイバーンのいる広間から一階層下ったところで、彼らを待ち受けていたのは、大量のモンスターたちによる一斉攻撃だった。

数多のモンスターが一堂に会して冒険者を襲つ、いわゆるモンスターハウスと呼ばれるトラップだ。

滅多に現れないが、万が一遭遇した時には、生きて帰るのは難しいと言われる地獄の巣窟である。肉の一片も残らず、白骨になって見つかったパーティもいるとされている。

「なぜこうなるのです！ 行きはまったくモンスターなど出てこなかったのに、どうして」

「……あたし、知らない。こんな量、戦えない」

シータが泣きそうになりながら魔法をひたすら放つが、一向に敵の数が減る様子はない。二人は知らなかった。行きは、モンスターたちがゼクトらを避けていたのだ。

そしてそれは、タイラーがいたからだだった。

彼自身にも自覚はなかったが、タイラーから進る底知れないオーラに、モンスターたちが怯えていたのである。それこそワイバーンでなければ、挑もうともしないほど、そのオーラは強烈だった。

だが、そのタイラーを無能だと履き違えて捨ててきたゼクトたちは、今となっては格好

の餌食である。

しかも、先ほどまで暴れられなかった鬱憤を晴らそうと、モンスターたちはいきり立っていた。

中級ダンジョンには、スライムのような雑魚のみならず、オークやトロールといった大型モンスターもいる。

それらが団結して襲いかかってくるとなれば、対処するのは難しい。

「まあ、私にかかれば中級モンスターなど、あの二人がおらずとも容易いですよ」

ゼクトはそう言つて剣を構えるが、実際のところ彼の實力は初級冒険者に毛が生えた程度だった。火属性魔法の威力こそ優れているものの、魔力操作が苦手で繊細な動きができない。

これまではタイラーの的確な状況判断があつたおかげで、効率的に戦うことができ、ゼクトの魔法も活かされていたのだ。

タイラーの戦術はモンスターとの実力差を埋められる程度に、優秀なものだった。

タイラーに任せきりで、戦術や駆け引きといったものをまともに知らないゼクトが、闇雲に技を放つてもいとも簡単に避けられてしまつ。

「くそっ、なぜ見切られる！」

むしろ、モンスターたちの闘争心を煽ることにしかならず、ゼクトはしつぺ返しを食

らう。

シータの電撃魔法の方が敵を苦しめていたくらいだった。

「シータ、その調子です。全て倒してください」

「……凌ぐのが精一杯」

「リーダーに逆らうとは何事ですか」

ゼクトは落ちてきた眼鏡を押し上げる。自分が明白に役立たずと化しているこの状況にイライラとして、眉間に眼鏡をめり込ませてしまった。

そんなゼクトの隙を突いたトロールが、彼を蹴り飛ばす。

眼鏡も踏み潰されて破壊され、腰に提げていた剣の片方も一緒に飛ばされてしまった。

「シータ、助けてください！ 頼みます……」

情けない声をあげるゼクト。それに反応しようと思っても、シータもすでに満身創痍だった。

これまで雑魚だと馬鹿にしてきたモンスターたちに好き放題やられる。

もはや歯が立たず、瀕死の状態で二人は地面に伏した。

いよいよトロールが二人の捕食にかろうと接近する。

その時、大きな音がダンジョン中に響いた。

タイラーがワイバーンを討つ際に放った技が勢い余って、ダンジョン自体を揺らした

のだ。

その音に二人が驚いているうちに、モンスターたちは我先にと退却していった。

ダンジョン内に起きた異変を、モンスターたちはその身で感じ取り、恐れをなしたのである。

だがそんなことを知らない二人は、自分たちに訪れた幸運だと捉えて、それぞれ逃げ出す。

もはやお互いのことなどどうでもよかった。

そうして二人は、ばらばらに命からがら逃げ帰ったのだった。



まさに勝利の凱旋と言っている。

俺、タイラーはワイバーンを倒したあと、アリアナとともにダンジョンの出口を目指していた。

帰り道も、敵に出くわすことはほとんどなかった。

稀に襲いかかってくる血の多いモンスターもいたが、むしろ技を試すのに、絶好の機会だったくらいだ。

「猛き炎で打ちのめせ、フレイムソードッ!!」

魔法の威力はどれも凄まじく、慣れないゆえに反動でよろめいてしまう。

「すごい、すごい! それに格好いいかけ声よ! もっと見た方がいい!」

アリアナは俺が戦っている横で、手放して拍手を繰り返していた。

照れ臭くて、鼻をぼりぼりと掻く。一方の彼女は、鼻高々といった様子だ。

ちなみに先ほどのやや格好つけた詠唱は、アリアナの考案である。

可愛いものだけでなく、格好いいものも彼女の心をくすぐるらしい。

端的に技名を唱えれば魔法は発動するのだが「格好いい技には格好いい詠唱が必要だ」

という彼女の言葉に押し切られ、こうなったのだ。

ただ、一方でふざけてばかりかといえはそうではない。

俺が技に集中しすぎて、横からの奇襲に対応し損ねた時に守ってくれるあたり、彼女も

警戒を怠っていることはないようだった。

冒険者の鑑である。俺もその心は見習わなくてはならない。

『冒険者たる者、決して慢心するな。慢心したところから、足元を掬われる』と親父もよ

く言っていた。

先ほどレベルの上がった水や雷といった属性を除けば、まだほとんどの魔法がレベル1

だ。冒険者レベルも20。まだまだ上を目指さなくては。

とはいえ、アリアナに褒められればどうしても頬は緩んでしまう。

容姿端麗なだけではなく、そのまっすぐな性格含め、幼い頃から強く意識してきた相

手だ。

そうしてしばらく歩いていると、アリアナが顔をしかめた。

「うげ、嫌なもの見つけたかも」

目の前に落ちていたのは、ボロボロになった剣の柄だった。それも、見覚えがある。

「これ、ゼクトの剣だよな」

「たぶんね。割れてるみたいだけど」

「というか、もはや柄以外残ってないな」

帰りがけになにかあったのだろうか。

なににせよ、そのまま放置するのは、ゴミを放置するみたいで心が痛む。

仕方なく、拾ってからダンジョンの外へ向かったのだった。

俺たち冒険者が所属するギルドは、ダンジョンが地殻変動によって生まれると、その調査後に建造される。

ギルドはダンジョンに関係のない人間が出入りするのを防ぐ検問的な役割を持ち、基本的にダンジョンの入り口に地続きで建てられているのだ。

俺たちが住んでいる町——トバタウンのギルドもまた同じように、俺たちがさっきまでいた中級ダンジョンと外とを繋ぐ役割を持っていた。

ダンジョンの出口から直進することしばし、俺とアリアナは冒険者ギルドにたどり着く。アリアナは真っ先に受付へと向かった。

「あら、アリアナさん。依頼お疲れ様です……ってどうされましたか!?」

アリアナはものすごい剣幕を見せていた。その勢いに、受付のエルフのお姉さんは目を白黒させる。

「どうもこうもないです！ 私たち、パーティーリーダーに置いていかれたんです！」

「そういえば先ほどゼクトさんらしき人影が慌てて出ていくのを見かけましたが……」

お姉さんは、そこで言葉を切ってから申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「詳しい話をすぐにでも伺いたいたところではあるのですが、不測の事態の場合は責任者がギルドにいる時ということになっておりまして、明日お聞かせいただく形でもよろしいでしょうか」

どうやら口ぶりから察するに、今日報告するのは難しそうだ。

アリアナもそれを理解したのか、いまいち腑に落ちない様子ではあったが、引き下がる。

「……そういうことなら仕方ないわね。また明日来るわ」

アリアナは、それだけ言って俺の手を引いた。柔らかにほっそりした指から、ほのか

な熱が伝わってくる。

受付から離れたところで、アリアナは口を開いた。

「とりあえず、ゼクトたちのことは一旦忘れましょ。まずはそれよりも大切なことがあるでしょ」

「……俺の誕生日？」

「そう。ね、タイラーの家に行く前に、私の家に寄っていい？ ちょっとした贈り物を用意してるのよ」

ぼろぼろになった防具類をギルドの修理窓口に預けた後、ギルドを出た俺たちは中心街を抜けた先にあるアリアナの家に寄った。

それから、やや離れたところにある俺の家へ向かう。

トバタウンの郊外から、少し中心に寄ったところ、住宅密集地にある長屋が俺の家だ。決して立派なものじゃないし、築年数もかなり経っている。つまりまあ、はつきり言うてボロい。

「お兄ちゃん！ 遅いから心配したんだよ」

だから、家の前に着いた途端、妹のエチカが扉を開け放つたのには少しヒヤリとした。軋む金具に意識がいつてしまい、倒れかかってくるエチカを抱きとめ損ねる。

勢い余って、後ろにいたアリアナにもたれかかってしまった。背中にぽよんとした感覚が当たる。

すぐにアリアナが困ったような声を出した。

「タ、タイラー、早く中に入れてよ……誰かに見られたら恥ずかしい」

そこで、俺の後ろにいるアリアナの存在によりやく気づいたエチカは、柔らかな笑みを浮かべた。

「嬉しい！ アリアナさんも来てくれたんですね！」

「こんにちは、エチカちゃん。お邪魔するわね」

エチカに引き連れられ、家へと入ったのだが、居間に入るやいなや彼女はへろへろと椅子に座る。

今日は体調が良さそうだと安心していたら、空元氣だったらしい。

サイドテールの髪からはハリが失われ、目もうつろになっていた。

元々体が弱かった母親の遺伝で、体に力が入らないことが多いのだ。

治療法は解明されておらず、街で回復を専門にする治療師に頼んでも完全には治っていない。

「おい、大丈夫か。エチカ」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんの誕生日に倒れてなんかいられないよ」

私の心配より、お祝い！ と駄々をこねるが、明らかに体調が思わしくない。

帰宅するのは昼頃と言ったのに、すでに夜に近い時間になっているから、俺の帰りが遅いことによりほど気を揉んでいたのだろう。

その髪を撫でてやっていたところで、思い出した。

そうだ、俺には頼りになる猫耳少女がいたじゃないか、ということできつそく召喚する。

「お兄ちゃん、魔法使えるようになったの!？」

妹よ、驚くにはまだ早い。なにせ光の猫が人型に変化するのだ。

「呼ばれて飛び出た！ キューちゃんですよ、ご主人様！」

「出たわね、化け猫……」

「失礼な。またいるんですか、あなたは。ご主人様をたぶらかしたら怒りますよ。精霊獣の恨みは人智を超えますからっ」

繰り広げられるキューちゃんとアリアナの物騒なやり取りを前に、妹の処理能力は限界がきたらしい。

ばたり、と椅子の背にもたれかかってしまった。

うわごとのように、猫さんが人に……と呟いている。

だが、説明より治療が先だ。

「……キューちゃん、早いところ頼む」

「まかされたにゃん♪」

キューちゃんはすぐにエチカの元へ向かい、例の治療を始めた。

さすがに妹のあられもない姿に興奮することはなかったのだが、キューちゃんが見ておけ、と言うので仕方なく見る。

施術が終わると、妹は調子を取り戻していた。これまでも回復を何度も試みてきたが、それとは比にならないほどの回復具合だった。

「不思議、さっきまで少しも力が入らなかったのに……!」

声も明るいし、なにより、小さくではあるが、跳ぶこともできるほどになっていた。

「どーでしょう。ボクの技は! すごいでしょ、ご主人様?」

みんなで喜び合っていたら、キューちゃんが猫の姿に戻って、俺の肩にぴよんと乗る。

そして、耳元で小さく囁いた。

「ご主人様。ボクの実力不足なのですが。実は、エチカ様はまだ完全には回復できていません」

「……そうなのか」

俺は気を引き締めなおす。

「はい。でも、治らないわけじゃありません。超上級のダンジョンに生えているハオマという薬草が手に入れば、絶対治ります」

立ち読みサンプル はここまで

「……そんなの初めて聞いたけど? 治療師は、これまで『難しい』の一点ばりだったし」

「なんせボクは超特別な光の精霊獣なので! 見るだけで必要なものくらい分かりますつ。その辺の治療師なんかと一緒にされても困ります! 信じてください、ご主人様!」

キューちゃんは強く主張し、必死に尻尾を振る。そのたびに俺の首筋に触れるのが、どうにもこそばゆい。

「……分かった。ありがとうな、キューちゃん」

「いえつ、ご主人様のためならなんなりと! あ、ちなみにボク、今の治療でレベルが上がりました。レベル2です! 偉いですか? 偉いですよね、ご主人様!」

「ああ、偉いし……本当に助かったよ」

俺がベタ褒めすると、にまにましながらキューちゃんは姿を消した。

その後、三人だけのささやかな誕生日会が始まる。

揚げたチキンやグラタンなどが並んだ食卓は、十分すぎるほど豪華だった。

食後のケーキは、エチカが焼いてくれていた。アリアナが持ってきてくれた果物を載せれば、見た目も華やかになって、エチカはたいそう喜んでいた。

そして、アリアナが家に取りに行ってくれた誕生日の贈り物は――

「はい、これ! 似合うの探して、結構迷ったんだからね」